

Jonathan Swift の関係詞使用を巡っての一考察

島田 悠太

1. はじめに

18 世紀の時代は高まる規範主義の影響の下、‘efforts began to be made to fix the language’ (Bryant 1962: 89)といった動きが見られ、このような状況の中で、18 世紀初頭、Jonathan Swift は *A proposal for correcting, improving and ascertaining the English tongue* (1712)(以下、『国語科案』とする)を提出する。同著において、Swift は当時の英語の現状に関して以下のように述べる。

My LORD; I do here, in the Name of all the Learned and Polite Persons of the Nation, complain to Your LORDSHIP, as First Minister, that our Language is extremely imperfect; that its daily Improvements are by no means in proportion to its daily Corruptions; that the Pretenders to polish and refine it, have chiefly multiplied Abuses and Absurdities; and, that in many Instances, it offends against every Part of Grammar. (8)

そして Swift が上記の『国語科案』を提出するのとはほぼ同時期に雑誌 *The spectator* 誌上に掲載されたのが ‘The humble petition of *who* and *which*’ (1712)という記事であった。この記事の中で、擬人化された関係詞 *who* と *which* がある嘆願を行っている。両者は、‘We [*who* and *which*] are descended of ancient Families, and kept up our Dignity and Honour many years, till the Jacksprat THAT supplanted us’ (Addison & Steele 1712: 450)と述べて、関係詞 *that* の使用頻度が関係詞 *who* と *which* のそれを上回っていることに関して不平を述べる。加えて ‘In the first and best Prayer Children are taught, they learn to misuse us [*who* and *which*]: Our Father WHICH art in Heaven, should be, Our Father WHO art in Heaven’ (452)と述べ、‘We desire you [Addison and Steele] to assign the Butts and Bounds of each of us’ (452) と関係詞 *who* と *which* が取りうる先行詞の区別を取り決めてほしいと嘆願している。¹この

¹ なお、この記事に関して、著者である Addison と Steele は *that* 関係詞よりも *wh*-関係詞の方が歴史的に古いとみなしている点において、関係詞の発達の歴史を考慮に入れていなかったことが伺える。なお、この点に関して、例えば、Jespersen (1927)は‘with total disregard of historical truth’ (81)と指摘し

ように見ていくと、18 世紀初期において、関係詞使用に混乱が見られた可能性が考えられるが、実態はどうだったのか。本論文では、この問題を考察していく。

2. Swift と同時代に出版された文法書の考察

本論文では、*The spectator* 誌上で展開された関係詞を巡っての記事が当時の状況を反映するものであったのかどうかという考察を主題とした上で、その一例として Jonathan Swift の散文作品の英語を調査したい。調査対象を Swift の散文作品にした理由は、主に二つある。一つ目としては、‘The humble petition of *who* and *which*’が掲載されたのとほぼ同じ時期に『国語科案』を提出している点で、Swift の英語に対する意識が高かったこと、そして、二つ目としては、Swift 自身が、‘One of the greatest difficulties in our language, lies in the use of the relatives; and the making it always evident to what antecedent they refer’ (Spence 1820: 281)と述べて関係詞使用の難しさを物語っているためである。

しかしながら、ここで Swift 作品の調査に入る前に、Swift と同時代に出版された文法書が、関係詞をどのように取扱っているのかを見ておくことにしたい。²本稿においては、Leonard (1929)、渡部 (1975)を参照にして、Swift と同時代に出版された文法書の一部を取り上げることにした。以下が本稿で取り上げる文法書である。³

1700: Brown, Richard. *The English school reformed*.

1705: Lane, A. *A key to the art of letters etc.*

1706: Anon. *The English scholar compleat*.⁴

1710: Turner, William. *A short grammar for the English tongue*.

1711: Brightland, John. *A grammar of the English tongue*.

1711: Greenwood, James. *An essay towards a practical english grammar*.

1712: Maittaire, Michael. *The English grammar*.

ている点も注記しておきたい。

² 18 世紀における関係詞の問題を、Wright (1994)は、‘The appropriate use of the *wh*-relative pronouns ...was a controversial issue for eighteenth-century grammarians’ (258)と指摘する。

³ データベースとしては、*ECCO (Eighteenth Century Collections Online)*を用いた。

⁴ 他の著作と異なり、ここで著者名を不明としているのは、この著作においてのみ表紙に著者の記載がなかったためである。

1724: Jones, Hugh. *An accidence to the English tongue*.

1728: Entick, John. *Speculum latinum*.

上記に挙げた文法書のうち、*The spectator* 誌上において取り上げられた問題、すなわち、①関係詞 *that* の問題と②関係詞の先行詞についての問題を取り扱っている文法書はどれだけあるのだろうか。

まず、①の問題から考察していきたい。この問題を扱った文法書は、Lane、Anon.、Turner、Greenwood、Maittaire、Entick であった。例えば Greenwood は以下のように述べる。

- (1) *That* is often used instead of *Who*, *Whom* and *Which*, as, I saw a Man *that* [*who*] had been on the same Side *that* [*which*] I had been on. He is the Man *that* [*whom*] we saw. (1711: 107)

例文(1)において、関係詞 *that* が *wh*-関係詞と交換可能であるということが述べられているが、ここで注目をしたいのは、例文(1)を見る限り、*The spectator* 誌上で議論された関係詞 *that* の優勢を物語るようなコメントや、関係詞 *that* の使用に關しての規範的なコメントが一切見られないということである。このような関係詞 *that* に関しての、いわば「中立的」とも言うべき見解は、他の文法書においても変わらなかった。

続いて②の問題に關して考察をしていく。関係詞の先行詞の問題を扱っているのは、Anon.、Turner、Brightland、Greenwood、Maittaire、Entick の 6 つの文法書であった。以下に示すのは、その内容を出版年代順に並べたものである。

- (2) Some are Relatives, and used in rehearsing, as it, *that*, *which*, *who*. Note, *who* is spoken of Persons only, viz. Men or Spirits; *which* and *that* indifferently of any thing; as. the Man or Book, *which* or *that* I saw. (Anon. 1706: 5)
- (3) ... the Relatives *who*, *which*, and *that* (for *who* or *which*) may be of any Person. (Turner 1710: 12)
- (4) *Who*, is always said of Persons, *which* of Things, excepts in the old exploded way of Writing, before the Propriety of English Words was sufficiently understood; particularly, the Translations of the Bible into our Tongue, *which* want many Grammatical Corrections. (Brightland 1711:

91-92)

- (5) It [*which*] is spoken both of Things and Persons (tho' chiefly of Things) as *who* and *whom* are used when we speak of Persons. ...And *who* would been in this Place more proper, because it speaks of a Person and is now adays more frequently used. (Greenwood 1711: 264)
- (6) *This* is common to all genders; *who*, to masculine and feminine: *which* is more usually neuter; common use very seldom prevails otherwise, as our father, *which* art in heaven. (Maittaire 1712: 32)
- (7) Yes, when the Antecedents are without Life; and this may be known easily in English, for it is always *which*, not *who*. ...The Bows and Arrows *which* are broken; here the Relative *which* is the Neuter Gender rehearsing Bows and Arrows, things without Life. (Entick 1728: 29)

以上の 6 つの引用例を考察していくと、関係詞 *who* の先行詞の問題に関しては、関係詞 *who* が先行詞として取るべきものが人であるとすべての文法書が述べている点で意見の一致が見られるものの、関係詞 *which* の先行詞に人が来るか物が来るかという問題に関しては、当時の文法家の間で意見の揺れが見られるということが判明する。⁵ Anon. (1706) と Turner (1710) は、関係詞 *which* が人・物両方を指しうることを指摘する一方で、Greenwood (1711) と Maittaire (1712) は、関係詞 *which* の人への適用に慎重になっている様子が伺われる。しかし、Brightland (1711)、Entick (1728)においては、関係詞 *which* が人ではなく物を指すことが明示される。⁶ この関係詞 *which* の先行詞を巡る問題は、関係詞の先行詞そのものに触れなかった文法書でも、その文法書が取り上げた例文において、文法家の先行詞に対しての見解が垣間見えるものが存在した。例えば、Jones (1724)において、以下のような例文が取り上げられていることは注目に値しよう。

- (8) 2. Concord. The Adjutant agrees with its Correspondent Word in Gender, Number, and Person; as I heard the Boy, *which* had learnt his Lesson, and

⁵ Yahashi (1996)は、‘The grammarians in the eighteenth century appear to produce different regulations on the relative pronouns, for they make their rules on their own authority’ (97)と指摘している。

⁶ この問題に関して、Bately (1965)は、‘it was not until the end of the first decade of the eighteenth century that its pronominal use [the pronominal use of *which*] with personal antecedent became actually proscribed’ (249)と指摘している。

commended him, because he had said it well. (39)

例文(8)の後半部以降、‘as I heard the Boy’以下の例文に注目をしたい。すると、the Boy を先行詞とする関係詞構文に *which* が使用されていることが伺える。結論として、18 世紀初頭の時代において、関係詞 *which* の先行詞の問題は、文法家の間で意見の齟齬が起きていた可能性が高いと思われる。

3. Swift の作品調査

前節では、今回の調査対象とする Swift の作品とほぼ同時代において出版された文法書において、関係詞がどのように取り扱われていたかを考察した。その結果として、①関係詞 *that* に関しては「中立的な」コメントに留まる一方で、②*wh*-関係詞の先行詞の問題に関して、特に関係詞 *which* の先行詞に人が来るか物が来るかという問題に関しては、文法家達の間でも意見の齟齬が見られることが明らかとなった。このようなコンテキストの中で、同時代人の Swift はどのような関係詞使用をしていたのかを見ていきたい。

3.1. 調査対象とする作品と調査方法

まずは、今回の調査において取り上げる Swift の作品の対象を明らかにすることから始めたい。今回の調査においては、数ある Swift の作品から、散文作品 9 作品を調査対象とした。出版年代順にまとめると以下になる。⁷

1705: *A Tale of a Tub*. (TOT)

1705: *The Battle of the Books*. (BOB)

1711: *The Conduct of the Allies*. (COA)

1712: *A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue*. (PET)

1713: *The Blessings of Peace*. (BOP)

1719-1720: *A Letter to a Young Gentleman*. (LYG)

1721: *A Letter of Advice to a Young Poet*. (LAYP)

1726: *Travels into Several Remote Nations of the World*. (TW)⁸

1729: *A Modest Proposal*. (MP)

⁷ カッコ内は略称である。

⁸ 今回の調査対象としたのは、第一章‘A voyage to Liliput’である。

なお、具体的な調査の対象としては、‘The Humble petition of *who* and *which*’の内容に則って、Swift の作品中における①関係詞 *who*、*which*、*that* の出現頻度と②*wh*-関係詞の先行詞の問題の二点に焦点を絞っていく。

3.2. Swift 作品中の関係詞 *who*、*which*、*that* の出現頻度

本節以降、Swift 作品における関係詞使用を具体的に考察していく。まずは、Swift の使用した関係詞の例文を見ることから始めたい。Swift 作品を調査した結果として、Swift は以下のような形で関係詞 *who*、*which*、*that* を使用していたことが明らかとなった。⁹

- (9) ...Harry the Second, ***who*** had large Territories on that Continent... (Swift 1712: 11)
- (10) Flanders may recover that beneficial Trade ***which*** we got from them... (Swift 1711: 40)
- (11) ***THE Motives that*** may engage a wise Prince or State in a War, I take to be one or more of these... (Swift 1711: 7)

例文(9)は関係詞 *who* の構文を、例文(10)は関係詞 *which* の構文を、例文(11)は関係詞 *that* の構文をそれぞれに指している。

では、ここで、Swift の 9 作品中における関係詞 *who*、*which*、*that* の分布をみていきたい。以下にあげるのは、Swift の作品調査を通して得られた、Swift 作品中における関係詞 *who*、*which*、*that* の分布である。

表 1. 関係詞 *who*、*which*、*that* の分布

	<i>TOT</i>	<i>BOB</i>	<i>COA</i>	<i>PET</i>	<i>BOP</i>	<i>LYG</i>	<i>LAYP</i>	<i>TW</i>	<i>MP</i>
<i>who</i>	104	24	98	29	18	40	19	65	24
<i>which</i>	224	59	169	56	12	57	65	242	20
<i>that</i>	57	14	20	9	6	2	7	33	3
Total	385	97	287	94	36	99	91	340	47

表 1 から明らかになるのは、Swift の作品を見る限りにおいて、関係詞 *that* の優勢は見られないということである。*that* 関係詞の *wh*-

⁹ 例文中において、下線は先行詞を、イタリックのボールド体は関係詞を、それぞれに示している。

関係詞に対する割合は、*TOT* で 14%、*BOB* で 14%、*COA* で 7%、*PET* で 9%、*BOP* で 17%、*LYG* で 2%、*LAYP* で 8%、*TW* で 9%、*MP* で 6%となっており、極端に *that* 関係詞が少なくなる *LYG* の例を含めて、いずれの作品でも *that* の使用頻度はそれほど多くなっているとはいえず、ということが伺える。¹⁰

3.3. Swift 作品における先行詞の取り扱いに関して

前節では、Swift 作品に関する限り、*that* 関係詞の使用頻度が高いということが浮き彫りとなった。今節においては、本論文における二点目の焦点、すなわち、*wh*-関係詞の先行詞の問題を見ていくことにする。

まずは、関係詞 *who* の議論から始めていきたい。Swift 作品中において、関係詞 *who* は以下のような形で使用されていた。

- (12) ...you are perfectly dosed and flusted, like one *who* drinks too much in a Morning. (Swift 1704: 298-299)

例文(12)において、関係詞 *who* の先行詞は、人となっている。そして、Swift 散文作品中における *who* を用いた関係詞構文を、その関係詞が取る先行詞の種類に基づいてまとめたのが、以下で示す表 2 となる。

¹⁰ Swift はなぜ、*that* 関係詞よりも *wh*-関係詞の方を多く使用したのか。この理由は、Jespersen (1927)の指摘、‘*Who* and *which* reminded scholars of the Latin pronouns and came to be looked upon as more refined or dignified than the more popular *that*’ (80)に帰せられるかもしれない。ラテン語が Swift の語法に影響を及ぼしていたことは、18 世紀後半期において早くも James Buchanan という人物によって指摘されている。Buchanan の以下の指摘も併せて参照したい。

Should it be urged, that in the Time of those Writers [Swift, Addison, Pope, and so on], English was but very little subjected to Grammar, that they had scarcely a single rule to direct them; a Question readily occurs; Had they not the Rules of Latin Syntax to direct them? For, was it not formerly a prevailing, though erroneous Notion, that no one could write English grammatically without learning Latin? But to set such a Notion in a proper Light, it may be worth while to consider how far the Rule of Latin Syntax are subservient to writing English correctly. (1767: ix)

表 2. 関係詞 *who* と共起する先行詞の種類

	<i>TOT</i>	<i>BOB</i>	<i>COA</i>	<i>PET</i>	<i>BOP</i>	<i>LYG</i>	<i>LAYP</i>	<i>TW</i>	<i>MP</i>
Person	104	24	98	29	18	40	19	6	24
Thing	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Total	104	24	98	29	18	40	19	6	24

表 2 によって、Swift は、関係詞 *who* を先行詞が人の場合に限って適用していることが明らかとなる。

続いて、関係詞 *which* を考察していきたい。初めに、Swift 作品中における関係詞 *which* が使用された例文を取り上げる。Swift 作品中において、関係詞 *which* は以下のような形で使用されていた。

- (13) Besides, there is many an Operation, ***which*** in its Original, was purely an Artifice... (Swift 1704: 292)
- (14) I had somewhat more to say upon this Part of the Subject; but the Post is just going, ***which*** forces me in great Haste to conclude... (Swift 1704: 322)

例文(13)と例文(14)は、共に関係詞 *which* が使用された構文だが、それぞれの例文が取りうる先行詞の種類が異なる。なぜなら、例文(13)の関係詞 *which* が名詞（‘many an Operation’）を指しているのに対して、例文(14)の関係詞 *which* は節（‘the Post is just going’）を指しているためである。

そして、Swift の散文作品中において見られた *which* を用いた関係詞構文を、その関係詞が取る先行詞の種類に基づいてまとめたのが、以下で示す表 3 となる。

表 3. 関係詞 *which* と共起する先行詞の種類

	<i>TOT</i>	<i>BOB</i>	<i>COA</i>	<i>PET</i>	<i>BOP</i>	<i>LYG</i>	<i>LAYP</i>	<i>TW</i>	<i>MP</i>
Person	1	0	0	0	0	0	0	0	0
Thing	172	52	139	48	12	46	39	213	16
Clausal	51	7	30	8	0	11	26	29	4
Total	224	59	169	56	12	57	65	242	20

表 3 から明らかなのは、関係詞 *which* に関しては、ほとんど全ての事例において、先行詞を物としていることである。

確かに、*TOT* においては、一例のみ関係詞 *which* の先行詞が人に

なっている、と思われる事例が存在した。以下がその事例である。

- (15) Secondly, the true critics are known by their talent of swarming about the noblest writers, to **which** they are carried merely by instinct, as a rat to the best cheese, or a wasp to the fairest fruit. (1705: 90)

しかしながら、例文(15)中にある関係詞 *which* の先行詞である。‘the noblest writers’は、「偉大なる作家その人」というよりは、文脈から考えて、「偉大なる作家の本」と解釈するのが正しいように思われる。この事例は、Swift が、*wh*-関係詞を、先行詞が人を示すか、物を示すか、文脈上の意味に基づいて厳格に区別していたことを物語っている。

したがって、上記の考察を踏まえると、Swift は、関係詞の使用に関して、文法家の間で揺れが見られたと思われる 18 世紀初期の時代において、一貫した態度を保っていたことが伺える。

4. おわりに

以上、本稿においては、18 世紀初期の関係詞使用に関して、Swift の英語を調査することによって議論を行ってきた。その結果として、Swift の英語に関する限り、①*wh*-関係詞の方が関係詞 *that* よりも出現頻度が高いこと、そして、②関係詞の先行詞の種類に応じて、*who* と *which* を厳密に使い分けられていることが明らかとなり、‘The humble petition of *who* and *which*’の内容が当てはまらないことが明らかとなった。特に②に関しては、Swift と同時代の文法家達の間で意見の揺れが見られた問題であったことが今回の調査を通して浮彫りとなっただけに、非常に興味深い事例であるとも言える。Beal (2004)は、18 世紀の関係詞に関して、‘the patterns of relativization found in present-day Standard English were introduced during the early modern period, and subjected to regulation in the eighteenth century’ (75)と述べているが、Swift の関係詞使用に注目をしていくと、‘The humble petition of *who* and *which*’の内容とは合致せず、同時代の文法家達の間で意見の揺れを見せていた文法項目に関しても、一貫性を見せていたことが明らかとなった。18 世紀後期において、規範主義の大家の一人とみなされる Robert Lowth は *A short introduction to English grammar* (1763)において、Swift を以下のように評価する。

Swift must be allowed to have been a good judge of this matter [grammar].
He was himself very attentive to this part, both in his own writings, and in
his remarks upon those of his friends: he is one of our most correct, and
perhaps our very best prose writer. (1763: iii)

Lowth は、Swift を、文法的に最も正しい書き手の一人であったと
みなしている。この Lowth による Swift 評は、Swift の生きた 18 世
紀初期において、関係詞の語法に混乱があった点を踏まえるならば、
注目に値する。なぜならば、Swift の関係詞の語法は、同時代の混乱
期においても一切の揺らぎを見せず、現代英語にかなり近い傾向を
見せていたことが今回の調査で明らかとなったためだ。その意味に
おいて、Swift は、18 世紀後期の時代にクライマックスを迎える規
範主義の先駆け的存在の一人と言えるのかもしれない。

引用文献

- Addison, Joseph & Richard Steele. 1712. *The spectator*. London: Printed for S. Buckley.
- Anon. 1706. *The English scholar compleat*. London: Printed by W. O.
- Beal, Joan C. 2004. *English in modern times*. London: Hodder Education
- Bately, Janet M. 1965. *Who and which and the grammarians of the seventeenth century*. *English Studies* 46: 145-50.
- Brown, Richard. 1700. *The English school reformed*. London: Printed for A. and F. Churchill.
- Bryant, Margaret M. 1962. *Modern English and its heritage*. New York: Macmillan.
- Buchanan, James. 1767. *A regular English syntax*. London: Printed for J. Wren.
- Entick, John. 1728. *Speculum latinum*. London: Printed by R. Tookey.
- Greenwood, James. 1711. *An essay towards a practical English grammar*. London: Printed by R. Tookey.
- Jespersen, Otto. 1927. *A modern English grammar on historical principles, part III syntax. Second volume*. Heidelberg: Carl Winter.
- Jones, Hugh. 1724. *An accidence to the English tongue*. London: Printed for John Clarke.
- Lane, A. 1705. *A key to the art of letters etc*. London: Printed for Ralph Smith.
- Leonard, Sterling Andrus. 1929. *The doctrine of correctness in English usage 1700-1800*. Wisconsin: Madison.
- Lowth, Robert. 1763. *A short introduction to English grammar*. Dublin: Printed by

- H. Saunders.
- Maittaire, Michael. 1712. *The English grammar*. London: Printed by W. B.
- Spence, Joseph. 1820. *Anecdotes, observations, and characters, of books of men*.
London: Published by W. H. Carpenter.
- Swift, Jonathan. 1704. *A tale of a tub*. London: Printed for John Nutt.
- Swift, Jonathan. 1711. *The conduct of the allies*. London: Printed for John
Morphew.
- Swift, Jonathan. 1712. *A proposal for correcting, improving and ascertaining the
English tongue*. London: Printed for Benj. Tooke.
- Swift, Jonathan. 1713. *The blessings of peace*. Dublin: Printed by Edward Waters.
- Swift, Jonathan. 1721. *A letter of advice to a young poet*. Dublin: Printed and sold
by W. Boreham.
- Swift, Jonathan. 1726. *Travels into several remote nations of the world*. London:
Printed for Benj. Motte.
- Swift, Jonathan. 1728. *Miscellanies in prose and verse*. London: Printed by and for
Sam. Fairbrother.
- Swift, Jonathan. 1729. *A modest proposal*. Dublin: Printed by S. Harding.
- Turner, William. 1710. *A short grammar for the English tongue*. London: Printed
and sold by J. Downing.
- Wright, Susan. 1994. The critic and the grammarians: Joseph Addison and the
prescriptivists. In Dieter Stein & Ingrid Tieken-Boon van Ostade (eds.),
Towards a standard English 1600-1800, 243-84. Berlin: Mouton de
Gruyter.
- Yahashi, Chie. 1996. Chapbook relative pronouns with reference to eighteenth
century grammars. *Zephyr* 10: 95-110.
- 渡部昇一. 1975. 『英語学大系 13 英語学史』 東京：大修館書店.